OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代資本主義社会の空間的位相をめぐって(1)：Harvey,D.の都市空間論の考察
Author(s)	関, 嘉寛
Citation	年報人間科学. 1999, 20-2, p. 359-376
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12674
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代資本主義社会の空間的位相をめぐって（1）

―― Harvey, D.の都市空間論の考察 ――

関　嘉寛

〈要旨〉

ギデンスが指摘するように、今日まで社会理論において時間的視座が優位を占めてきた。しかし、現代社会を分析する場合、このような限定されたパースペクティブでは説得力のある議論ができない。そこで今、社会理論に空間論的視角が必要となってきているといえる。

そこで、本稿ではハーヴェイを中心とした社会空間の生成の議論に焦点を当てることで、前述の理論上の問題点えお克服するための方向性を洗いだしていく。ハーヴェイは、資本蓄積過程が根源的に抱える過剰蓄積という矛盾を回避する過程において都市空間が生じることを明らかにした。彼に従うならば、「資本の第二次循環」が都市を生み出すことになる。この危機を回避する戦略を通じて、資本は生産のため、および消費のために建造環境が創りだしていく。しかもこの過程は、資本の論理に沿った均質な空間を創り上げるというよりもむしろ、地理的不均等性を形作っていく。まさにこの地理的不均等性こそが社会的不平等性を表すものであると同時に、それを支えているのだ。

現代社会においてこのような資本によって組織化される（都市）空間編成は、新たな段階に突入している。それは、資本蓄積様式の変化、言い換えるならばフォーディズムから「フレキシブルな蓄積」への転換によってもたらされた。この段階において、我々は今まで経験したことのない、「時間―空間の圧縮」にさらされることになる。この状況こそが、ポストモダニズムを特徴づけている。ハーヴェイによるとそこで、均質化されながらも同時に断片化されたアイデンティティを取り戻すために、我々は新しい〈場所〉を獲得する必要が生じてくるのだ。

しかし、ポストモダンにおいてアイデンティティの基礎となる〈場所〉を志向するハーヴェイの議論には、それまでの議論と矛盾がある。彼が考える〈場所〉は以前とは異なり、あたかも資本の介入を受けない純粋な〈場所〉を想定しているのである。

キーワード

空間、資本の第二次循環、フレキシブルな蓄積、
時間―空間の圧縮、場所

はじめに：時間から空間へ

我々は日頃、意識的にしろ無意識的にしろ「進歩」あるいは「発展」することを絶対的な善、または目指されるべき方向と見なしてきた。「向上心」を持ち、自己を「成長」させていく人間は、一つの理想的な人間像とされてきた。そして、次の世代を生み出し、社会化させていくことは、重要な役割の一つとして考えられている。このような暗黙の了解に現れているのは、一般に抱かれている（特に直線的）時間への信仰とでもいうべき傾向である。

一方、資本主義的経済・社会システム分析において、これまで多くの場合、時間的側面に光が当てられてきた。例えば、近代経済学においては、明示的にしろ暗示的にしろ西欧型経済発展モデルをマスター・タイプとし、そこへと至る単線的発展図式が描かれてきた[1]。また、組織論においては、組織の時間的変容（組織の成立・維持、目的の変更、資源の動員等）が分析の中心的な分析対象であった。そして、マルクス主義においても資本主義の特質を、不可避的に危機と階級闘争に導くような、生産の諸力と諸関係の内部矛盾に基礎をおく生産システムに求め、その歴史的発展をあとづけてきた。いずれのケースにしても、時間を中心に据えた現代資本制社会の分析が行われてきたといえる。

ではいったいなぜこのような事態が生じたのだろうか。その理由の一つには、資本主義システムが存続していくための基盤である資本の蓄積に求められるだろう。資本蓄積にとって重要な要素である価値・利潤の生産・再生産は、時間に左右される。生産過程に投入される価値の尺度であり利潤を生み出す労働の多寡は基本的には時間的に計算される。労働時間・労働日の延長や、単位時間あたりの労働生産力の増大が、剰余価値を生み出すと考えられているのである。また、資本を増殖させ、より効率的な資本蓄積をするためには資本の回転期間をより短くすることが必要となってくる。それゆえ、資本主義システムに対して、その特徴を捉えることは、その時間的要素に焦点を当てることと考えられてきた。確かに、このような社会理論における時間への偏重は、資本主義的経済システムが持つ時間的側面だけではなく、ハーヴェイがいうように人間の有限性にもその根拠は見いだされる。彼は「人は、自分が生きる瞬間を時間軸の中から勝手に選ぶことはできない。人の時間は決まっているのだから、決定論的な理論の中に時間を取り入れるのは、場所よりも容易だ」と述べている[2]。

このような時間偏重はどのような状況をもたらすのだろうか。ギデンスが主張するように、専門的知識と日常生活における我々の態度には再帰的な関係がある。したがって、時間論的偏重を帯びた社会理論は、現代社会に影響を与えており、また逆に影響を与えられてもいる。先に挙げた例のみならず、今日地球規模で課題となっている環境問題が発生した背景には、単線的発展主義が横たわっている。また、さまざまな民族紛争も、「創造された伝統」という時間的要素を強調するあまり、出口の見えない泥沼の争いに突入している。

このような時間論的社会理論において、空間は均質なもの、無視してよいものとして扱われてきた。「時間よる空間の廃絶」を説いたマルクス[3]も、やはり資本主義の空間的特質を十分に描いているとは言えない。空間は均質であり、単なる器として扱われている。しかし、フランスの社会哲学者アンリ・ルフェーブルは次のように述べ、空間的契機が資本主義の発展においていかに決定的な要素であるかを示している。「資本主義はこの一世紀の間、内部矛盾が弱められることを発見した。…［中略］…そして絶えず、『資本論』が書かれてから百年もの間『成長』する事に成功したのである。空間を占有し、空間を生産することによって、その価値を計算することはできないが、その意味を知ることになったのである」[4]。

ルフェーブルの主張が正しいのならば、空間は資本主義システムにとって重要な契機である。したがって、このシステムが帯びる性質を色濃く映し出している社会の分析において、空間論的考察、とりわけ都市空間への視座が必要となってくる。なぜならば、資本主義システムにおける社会空間は、主に都市空間という形態をとるからである。もちろん、この主張は資本主義社会すべてが空間によってのみ説明可能になるということを意味していない。ここで問題としているのは、空間を排除し、単線的な時間軸のみを分析の基礎におくような態度である。したがって、空間論的転回は、同時に時間論の転回も必要とするともいえる。

以上のような理論的背景から、本稿では、現代資本主義社会における空間的位相に焦点を当て、それが持つ特徴を明らかにしていく。その際、ハーヴェイの議論を中心的に取り上げる。彼は、マルクス主義的地理学の代表的研究者であり、資本主義社会における空間的位相に対して、早くから言及してきた数少ない論者の一人である。

一、資本主義システム分析の方向性

資本主義という矛盾したシステムがいかに再生産されていくかという問いは今なお、重要であり続ける。これは、マルクス主義の延命策の一環として見なされるべきではなく、資本主義社会を論じるものすべてにとって重要な理論的課題である。どれほど市場における競争の平等性・透明性を主張しようとも、現実に資本主義社会に不平等が存在しているのは明白な事実であるからだ。このような問題意識をもとに理論を打ち立てようとしていたのがレギュラシオン理論であった。彼らは社会闘争を社会諸関係を形成する重要な契機と認め、社会諸集団間での妥協形成による一時的な安定性の生産・再生産過程をレギュラシオンと呼んだ。しかし、レギュラシオン理論は資本主義のダイナミズムを捉えようとした視点を提示したということに対して一定の評価を受けるに値するであろうが、社会諸関係と資本主義経済システムの様態との連関を説明できるような概念を説得力を持つ形で提出してはいない。デミロビッチの言葉を借りると、「レギュラシオン様式におけるヘゲモニー概念の欠如」[5]が大きな問題として横たわっているのだ。たしかに、レギュラシオン様式とヘゲモニー概念との関連を明確にしようという議論もある[6]。

それによるとレギュラシオン様式のグラムシ流のヘゲモニーと等価であるとされる。しかしそれでは、レギュラシオン様式がグラムシ的ヘゲモニーとしてのみ有効性を持つ概念としてとらえられるだけでレギュラシオン理論の独自性を浮び上がらせることができない。結局このような議論においても、レギュラシオン様式の概念そのものの限界を乗り越え、その概念の豊富化あるいは精緻化を達成しているとはいえない。

では、レギュラシオン様式の捉えきれなかった資本の再生産、または変容の重要な契機となるであろうヘゲモニーはどのような形態をとるのであろうか。

資本主義システムが持つ空間的位相に注目するならば、「社会的生産・再生産を支え、促進するヘゲモニーは空間的形態をとる」といえるのではないか。資本主義システムの構造的性格を規定する一要因である資本蓄積は空間的条件、言い換えるならば社会化された空間編成としての都市の形態によっても強く拘束されている。そして同時に、資本主義社会の行為者である資本家・労働者たちの大部分が資本によって組織化される都市に暮らしている。したがって、都市空間において経済システムとしての資本主義と我々人間の社会関係の弁証法的関係が映し出されると考えられるのだ(7)。例えばニュー・アーバン・ソシオロジー中心的な論者であるカステルは、空間編成の象徴的意味としての「都市の意味」を占有することは、「その歴史的行為者（たとえば社会的階級）が、自分たちの利害と価値にしたがって社会を構築するための、創造的な過程」(8)といってる。

二、資本主義システムにおける空間

今日の資本主義社会に関する議論、特に資本主義システムが持つ特徴に関連づけた議論において、「空間」に関連する比喩が多く使われている。例えば、現代社会の特徴を「中心」「周辺」「境界」「領域化」「脱領域化」等、空間と関連したタームによって表されていることが多い。しかし、多くの議論においてその「空間」は曖昧なままである。これは、空間という言葉の意味があまりにも多義的であると同時に、周知のものという先入観があるためであろう(9)。したがって、このような空間論的社会理論において、空間概念の再考が重要な作業となっている。

空間概念の曖昧さは、空間の素材的側面からのみ捉える傾向を強めてしまう。このような空間を単なる資本循環の、または社会的行為の器であると見なす空間に対する無反省的な態度から発する議論に対して疑問を持たざるをえない。というのも、前述したように資本主義という経済システムは均質な空間ではなく空間的不均等性のなかで作用しているからである。脱政治的空間的な思考に一石を投じ、資本主義の空間的契機を強調したのが、ウォーラーステインの「世界システム論」であった。世界システム論において資本主義は中心―半辺境―辺境という空間的三層構造を持ち、利潤が辺境から中心へ運ばれる構造を明らかにした。この三層構造は世界システム内での地理的な位置をもあらわしていた。たとえば、中心たる西ヨーロ

ッパの周りに半辺境としての東ヨーロッパが存在しており、辺境として中近東・東南アジア・アフリカなどが位置している。さらに、その地域・国家機構（官僚制の発達程度など）や社会関係（民主主義の浸透度、資本家と労働者の関係など）の特徴も世界システム内での階梯によって規定されるのである。

この理論は従来までの単線的発展モデル的な資本主義認識をつき崩すという点で新しい地平を開いてきた。しかし、世界システムにおいて資本主義の流通面を強調しているために、生産の局面は等閑視され、生産過程の変化はシステムの運動に対して決定的な契機とはならないのである。つまり、生産過程の編成は外的に決定されるもので、その過程にかかわっている行為者間の社会闘争・妥協の帰結としては示されないといえる。そうなると、システムは我々の手の届かない超越的存在となり、システムの変容はシステムが持つ論理、すなわち長期波動に委ねられてしまう。しかしながら社会変容はシステムとさまざまな社会的行為の複合的影響関係によって決定づけられるはずだ。結局、世界システム論では、システムのダイナミズムに社会の変容を十分に位置づけることはできず、体制を維持するための議論に傾く危険性をはらんでいる[10]。前述の議論に沿うならば、世界システム論においても「空間」が単なる記述概念になっている。

したがって、資本主義社会の変容を把握するにあたって、経済システムと社会関係の関連を明確するため、空間にも十分に注意を払いながら、世界システム論が陥ったような資本主義の構造的安定性を前提としない議論が必要となってくる。そのような意味で、近年のハーヴェイらによる経済地理学の研究動向は注目に値する[11]。

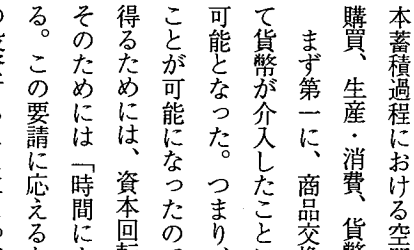
三、経済地理学における地理的不均等性

「資本空間論」としてのマルクス主義経済地理学の構築を目指すハーヴェイは『The Urbanization of Capital（邦訳『都市の資本論』）』において、資本流通のあらゆる契機において時間的条件のみならず、空間的条件すなわち、従来のマルクス主義者たちが見逃していた地理的不均等性が資本の論理を遂行するための決定的要素となることを示している。

資本空間論において地理的不均等性が問題にされるのは、理論的要請による。伝統的マルクス主義では、階級関係が社会的規定要因として取り扱われてきた。しかし、社会的に組織化された空間に着目する場合、階級関係が第一義的なものとして扱われなくなる。そこで、「伝統的に規定された階級関係と、それから階級対立や構造的変化とに一致するような、全くもって顕著な空間的相同物が存在することが明確に例証される必要が生じる」。この空間的相同物こそが、「支配的な中心と従属的な周辺とに組織的に分割されたところに存在すること、つまり地理的な不均等発展という概念の中にもっと正確に捉えられる」[12]ことになるのだ。

マルクスによると一般的に資本流通は次図のように示される[13]。

（Gは貨幣、WおよびW'は商品、Aは労働力、Pmは機械・エネルギ



I・原料・半製品などの生産手段、Pは生産、そしてΔgは利潤を示す。）

具体的には①と③は商品交換過程を、②は労働力の購買を表す。ハーヴェイはこの一般的な資本流通において、今まで等閑視されてきた空間が実は、重大な役割を果たすことを示していく。以下、資本蓄積過程における空間的契機について、商品交換過程、労働力の購買、生産・消費、貨幣の四つに分けて整理していこう。

まず第一に、商品交換過程について考えてみる。この過程において貨幣が介入したことにより、商品の売買の時間的、空間的分離が可能となった。つまり、直接交換によらずとも、資本を流通させることが可能になったのである。そして、より多くの利潤を短期間に得るためには、資本回転を早めることが当面の課題となる。しかし、そのためには「時間による空間の廃絶」が必要となってくるのである。この要請に応えるために、資本家たちは輸送手段・通信手段への投資することによって資本の流通速度を高めたり、信用貨幣が発達させ取引の空間的障壁を低くしたりしていく必要がある。

しかし、明らかに、どのような方法であれ、空間的障壁を削減するためには、時間と貨幣の損失を不可避的にともなう。したがって、資本循環をスムーズに行うために、商品市場は空間と時間において効率性を考慮される地理的な取引パターンに分節化されていくようになるのである。とはいっても、商品市場の地理的構造が資本流通に決定されるというわけではない。むしろ、この構造が資本流通の規定要因となって、資本主義の動態を決定づけていく。

第二に、②の労働力の買い入れと販売はどうなるのだろうか。ここで売買される労働力の特徴は、他の商品と異なり、大部分が毎日出勤—帰宅を繰り返すことによって生産・再生産されるという点にある。いいかえるならば、その移動性は身体という物理的制約を受ける。したがって、この労働力という商品が流通する日単位の労働市場は一日に移動できる範囲に限られてくる。このように、資本流通の重要な要素の一つである労働力の獲得・生産・再生産は、空間的に決定されるのである。

さらに、この日単位の労働市場は通勤圏という形で現実化される。歴史的に見るとこのような労働市場の地理的展開によって、都市空間が形成されていったと考えられる。しかし、都市は労働者だけの生産・居住・再生産空間として、そして「固定された」空間としてのみ存在しているわけではない。例えば、都市に居住する労働者は、単身者に限らない。彼らと共に都市に居住しながら、生産過程に参入しない人々がいる。これらの人々によって、都市は常に刷新されていくという側面もある。換言すれば、消費過程によっても都市は変容していくのであり、都市の空間編成によって消費過程が規定されていくのだ。結局、労働者のみならず、このような人々を抱える都市には生産・労働に対してだけではなく、住居・食糧・扶養のためにも大規模な投資が行われて、「発展」していく。このように、都

市は単なる労働者の生産空間としてだけではなく、消費空間としても成立し、全域性をもった「都市」としての空間編成を成立させていくのである。

しかし、この投資は実際たとえばある地域へは低廉な住宅供給をすすめる一方で、別の地域へは文化施設を積極的に建設していくことになる。その結果、都市においては、均質な空間ではなく、不均等な空間を作りだされていく。この空間的な不均質性こそ、そこにおける地理的不均等性に対応しているのだ。そして、このように労働市場とその物質的な基礎である都市はつねに変容しながら、地理的不平等性を内包しつつ、すぐれた空間編成の生産を行うために資本家間の競争や階級闘争が生じる。このような状況と相まって、地理的不均等性はさらに都市空間に刻印される。結果として、空間は資本制システムのダイナミズムを決定する一方で、それによって再帰的に規定されていくことになる。

第三に、①②③全体に含まれる生産・消費における空間的契機について考えてみよう。この点に関してハーヴェイは労働の側面と固定資本の側面から検討している。まず、労働過程は時間的拘束性とともに、一定期間労働者を特定の場所に縛りつけるという空間的拘束性をもっている。そして、固定資本の方は（この場合、固定資本がもつ経済的寿命も関わってくるが）それが持つ相対的不動性のために地理的移動を制約されている[14]。例えば、固定資本としての工場は、効率的な立地という面から輸送・資源の調達などのを考慮に入れ、特定の場所に建設される。そして建設されてしまった工場は、何十年もその地に存続し、その建築物が（プラスおよびマイナスの）誘因となってそれの周りにさまざまな空間が形成される。

では消費の空間的契機はどのようであろうか。ハーヴェイは消費に関しても大きく二つの点から検討している。それは、生産と消費の分離に注目した考察と、有効需要の形成からの検討に分けられる。前者はいわゆる職住分離であり、生産空間と消費空間を区別することは資本蓄積にとってより効果的な空間が創造されていく過程を表わしている。この過程は同時に、労働者やその家族たちの生活のあり方を変容させていくことになる。そして、後者が問題となるのは、生産によって形成された価値を市場において実現するためには、有効需要が常に拡張されなければならないからである。

この際有効需要の源泉として次の三つが考えられる。第一に、労働者が賃金財を購買すること。第二に、ブルジョワが必需品と奢侈品を購買する。そして、第三に、資本家が投資財と中間製品を購買することである。これらの市場はそれぞれ固有の地理的特性を持っている。例えば、スーパーは工場地帯の真ん中にはできないだろうし、一般的な所得者層が大多数を占める住宅街の高級ブティックの結末は明らかなものだろう。このように、利潤獲得の条件となる有効需要も、地理的不均等と対応していくことになる。

そして第四に、全体として商品流通の流通過程の様相をかなりの程度規定している貨幣の契機に移ってみる。結論からいうならば貨幣の存在は空間的・時間的分散が進展していくなかで、社会的権力の集中を可能にしていったのである。貨幣は商品市場や労働市場の

空間的制約の克服と同時に、分業や消費の分散を可能にした。これは、資本循環における効率性が上昇したことを意味する。この貨幣を集中的に管理する主体こそ資本主義社会において、権力を有する主体として現れているのだ。

以上見たように、資本循環のなかで空間的条件、特に地理的不均等性は資本主義のダイナミズムを決定する重要な要素となっている。したがって、資本のフローは時間的にも空間的にも効率的に調整されていく必要性がある。このような資本循環の地理的基盤は資本蓄積が進行しうるための「合理的景観」[15]としての特定の都市空間を必要とするのは明らかである。しかも、このような調整によって効率をあげることを怠ることは資本蓄積の失敗、つまり競争の敗北を意味するの。したがって、資本主義社会では、このように組織化された空間は常に効率的に作りかえられなければならない。言い換えれば、資本主義下の都市空間は絶えざる変容のうちにある。まさに、「資本蓄積と都市空間の形成は手に手を携えて進む」[16]といえる。このような意味で、「空間編成の生産（the production of spatial configurations）は社会的再生産と蓄積の時間的ダイナミクスの全体にあって、『能動的契機』として」[17]捉えることができるのだ。

四、資本蓄積の危機と都市空間

以上のようなハーヴェイの議論にしたがうと、このように資本蓄積において都市空間は単なる素材ないしは障害物以上の存在であることがわかる。ではハーヴェイにおいて都市空間は具体的にはどのように形成されていくのであろうか。この議論の重要な概念は「建造環境 the built environment」と「資本の第二次循環」である。

マルクスが拡大再生産モデルで考察した諸関係を、ハーヴェイは「資本の第一次循環 the primary circuit of capital」と呼んでいる。これは、商品が生産過程内で生産され、消費されるプロセスである。ここにおいて、価値形成と価値増殖が達成されていく。しかし、このプロセスが矛盾ない状態で描かれるのは、この過程において生産された商品すべてが一定期間内に消費されるという限りにおいてである。しかしこのプロセスは完全に閉じたものではないことは明らかであろう。現実にはこの第一次循環において矛盾が生じ、価値形成と価値増殖が十分には成功しないのだ。具体的に、この矛盾とは無政府的な個別資本家間の競争によって引き起こされる「過剰蓄積」である。この過剰蓄積とは資本を用いる機会に比してあまりにも多くの資本が全体として生産されてしまうことによって生じる。それは次の四つの契機によって引き起される。

一、商品の過剰生産、すなわち市場における供給の過剰
二、価格に関する利潤率の低下
三、過剰資本（例えば遊休生産能力、あるいは利潤をもたらすために用いられる機会のない貨幣資本）
四、労働力の過剰、または／そして労働力搾取率の強化

このような資本の第一次循環における過剰蓄積の傾向という危機を、資本と労働力の減価や破壊なしに吸収し、回避するために資本

は第二次循環へとむけられていくと考えられる[18]。資本の第二次循環とは固定資本と消費元本の形成への資本のフローを示している。固定資本には、生産ラインや機械といった生産過程に囲い込まれたものと、土地や建物などの生産の物的枠組みとして機能するものとに区別できる。そして、後者の固定資本を「生産の建造環境 the built environment for production」と呼んでいる。一方、消費元本もさまざまな耐久消費財のような消費過程に囲い込まれているものと、家屋などのように消費の物的枠組みとしてはたらいているものとに区別される。この枠組みとなる消費元本を「消費の建造環境 the built environment for consumption」と呼んでいる。資本の第二次循環とはこれら二つの建造環境への投資を意味している。

過剰な資本が、これら建造環境への投資へと向けられることによって、第一次循環において生じた過剰蓄積という危機は一時的に回避されることになる。このように、資本主義システムは、過剰蓄積という危機を「空間的回避」という方策により当面解消していく。資本蓄積における危機の回避は世界システム論で議論されているような地理的拡大のみならず、都市空間のリストラクチャリングによってもなされているのだ。

資本の第二次循環の投資対象となる建造環境とは「さまざまな要素――道路・運河・埠頭や港湾・工場・倉庫・下水道・官公庁・学校や病院・住宅・事務所・店舗など――からなる複合的な商品」であり、これらの要素は「生産・交換・消費過程とのかかわりにおいて、総体的に機能」していく[19]。つまり、この建造環境こそが、地表に刻み込まれた物的形態またはこの施設が全体として互いに関連しあって生産した空間的組織形態のことであり、我々の住む都市空間の第一義的特徴をなしていく。

しかし、このような建造環境への投資は公共投資のように大規模で持続的になることが多く、またほとんどの場合通常の価格決定機構に則らない。しかも原則として出来上がったこの環境の使用はすべての資本家に開かれている。そのために、個別資本家にとって建造環境への投資は負担が大きく、投機的であり、逆に自らの蓄積にとって不利な状況をもたらしかねない。このような理由から、資本の第二次循環への資本のフローは傾向的に逓減してしまう。しかし、誰が資本の二次循環への投資を思い留ったならば、第一次循環で生じた矛盾を十分に吸収していくことができない。そこで、この建造環境への投資において、国家が大きな役割を果たしたことになる。国家は建造環境の創出に関わる長期的かつ大規模なプロジェクトにすすんで投資していくことになり、かつそうせざるをえなくなってしまう。

そしてさらに、この第二次循環への投資を安定させ保証するものとして、実際の生産と消費に先んじて「架空資本」を創出する通貨供給と信用貨幣が必要となってくる。この過程は、このような操作をコントロールする金融機関や国家機関の役割を重要にし、その影響力を増大させていく。つまり、第二次循環において、金融資本は産業資本と同等かそれ以上の影響力を持つことになる。

資本の第二次循環はその目的を果たすために、問題なく機能する

であろうか。言い換えれば、都市空間を編成するような公共投資を中心とした資本循環の促進は予測通り成功するだろうか。答えは明らかであろう。第二次循環では過剰蓄積を十分に吸収することができるはずはない。では、危機は次にどのように回収されていくのだろうか。

第二次循環によって解消しきることができなかった矛盾を吸収するために資本は第三次循環へとむけられていくことになる。この資本の第三次循環は次の二つを投資からなっている。まず第一に、科学・技術への投資である。これによって、科学を生産に利用し、それによって社会の生産諸力をたえず変革していくことを可能となっていく。第二は、教育や健康といった労働力の再生産に関わる広範な社会的支出への投資である。

時間による空間の障壁の廃絶を目指す建造環境への投資（資本の第二次循環）を通じて現在我々が目にする都市空間が編成されていく。では、資本が生み出し、維持し、変容させる都市は、いかに我々が生きる「都市」としての性格を備えていくのであろう。つまり、いかにして都市はその全域性、あるいは都市の意味を獲得するのであろうか。

都市的生活様式は、経済の空間的統合、それによってもたらされる価格を決定する市場の進展と、深く結びついている。都市域において労働市場と消費市場はある程度一致している。したがって、先述したように一つの都市域は個人が属している労働市場を意味すると同時に、その市場でえられる賃金によってある一定のスタイル・水準にもとづいた消費（労働力再生産）がおこなわれる領域を意味することになる。もちろんこの二つの領域が完全に一致することはないであろうが、結果的には一つの都市域が就業機会と消費機会との統一として規定されるようになる。その結果、「都市的生活様式は、個人の活動を類型化」し、「個人の活動は集合されて、大量の社会的に指定された剰余生産の動員、搾取および集中を可能にする経済的・社会的統合の様式を形作っていく」[20]。それは、都市が「構造的一体性」を獲得したことを意味している。この一体性のなかには、生活水準・生活の質とスタイル、労働の満足度（あるいはその欠落）、社会的諸階層そして労働・生活・余暇・娯楽などに対する全体的な一連の態度が含まれている。

そして、この一体性により、「個人と集団の多様なアイデンティティに基づく地域社会」が編成されていくのである。したがって、ハーヴェイにおいて都市とは、「資本流通の時間的過程のなで使用される労働によって打ち建てられた生産諸力の凝集体である」と同時に、「社会的再生産の示差的な地域社会へと分節された階級諸力の特殊な提携によって支配されており、不連続ではあるが、空間的には近接している労働市場、つまりその中で労働力に対する就業機会の日々の代用が可能であり、ある特定の示差的な労働力の量と質が見いだされるような労働市場」[21]として組織されたものと表される。

しかし、これは都市域が均質であることを意味してはいない。一つの都市域内でも労働市場は分断されており、さまざまな差別により消費の均質化は妨げられている。そして、このような都市域内

の分化こそ、地理的不均等性として都市景観のなかにあらわれてくる。「資本家間の競争と階級闘争は都市空間の形成のダイナミクスの総体を資本蓄積にとって合理的な物的・社会的景観の生産のほうに押しやった」[22]結果として、都市空間における地理的不均等が生じることになる。

以上のようにハーヴェイにおいては都市過程は資本の第一次循環における過剰蓄積という危機を回避するために建造環境を効率的な空間へと作りかえる動態として示される。しかし、このような都市過程において成立した建造環境は、危機を回避・吸収するという当初の目的を十分に果たすわけではない。これらの建造環境は都市空間の変容を促すと同時に、その停滞の原因ともなってしまう。例えば、生産の建造環境はそれが持つ不動性・永続性のために、またそれへの投資は非常に大きなものであるために、一度成立した建造環境を作りかえることは容易ではない。そのため、建造環境は償却期間が終わるまで、生産性を上昇させるというよりもその水準を一定レベルにとどめる傾向にある。つまり、「空間的障害を克服し、時間により空間を絶滅させるために、それ自体更なる蓄積の障害としてはたらく空間構造」がつくり出されてしまうのである。まさに建造環境とは「一連の特殊な物理的制約の牢獄に蓄積過程を閉じこめ拘束する」[23]空間となる性格を同時に備えているといえる。

前述したように過剰蓄積の危機は、地理的拡大や新しい効率的な空間の生産などの空間的移転によって回避されてきた。ただ危機の解決法は、空間的移転のみならず、もちろん時間的回避がなされてきた。例えば、将来の需要を見越した投資や資本の回転期間の短縮などがそれにあたるだろう。とすると、実際のところ資本蓄積過程においてより利潤を求めることは「時間―空間の圧縮（time-space compression）」を生じさせてきたのである。時間―空間の圧縮とは「空間と時間の性質を根本から変えるために、私たちが自分自身に対してする世界の表象の方法を、時にはまったくラディカルな方法でかえることを強いるような諸過程」[24]を表している。換言すれば、この時間―空間の圧縮のあり方によってその都市空間内で生活する人々の時間―空間の経験は左右されることになる。このようにして、現代資本主義社会において、「空間と時間に関する私たちの感覚は再秩序化」されているのだ。

五、フレキシブルな蓄積による時間―空間の圧縮

ハーヴェイはレギュラシオン理論のフォーディズム分析に則りながら、現代資本主義社会の変容を、フォーディズム的システムの崩壊から「フレキシブルな蓄積」への変化として描いている。

ハーヴェイはフォーディズムの危機を、地理的回避を通じての過剰蓄積の解消の能力である空間的な競争が事実上消滅し、その結果特定の国民国家内での負債や階級闘争の危機に加えて地理的で地政学的な危機として捉えている。このような危機に際して、新しい蓄積体制が生まれた。この新しい蓄積体制であるフレキシブルな蓄積は、剰余価値獲得のための「二つの基本的な戦略の単純な再結合」

によって成立した。この基本的な戦略が対象とするのは、一つには絶対的剰余価値であり、もう一つは相対的剰余価値である。前者においては、労働日の拡大が、後者においては組織的な技術革新が目指される。ただし、この二つの戦略自体、フォーディズムだけではなくどのような時代でも一定程度採用されていたものであり、特に目新しいものではない。戦略自体特殊ではないが、現代におけるこれらの戦略によって生じる結果は、特徴的なものといえる。例えば、今日の産業における情報・通信技術の発達は資本の流通過程を大きく変容させてきた。その結果、相対的な剰余価値を獲得するために「技術革新と市場志向の新しくよりフレキシブルなパターンを理解し、実行し、管理する能力を持った高度に熟練した労働力」が重要となってきた。その結果、労働者階級の内にも、このフレキシブルな蓄積に対応できる者と、対応できない者の間に格差が生じ、「非常に特権的な、ある程度まで権限を与えられた階層」とそれらから疎外された階層という内部分化が生じたのである(25)。

さらに、新しい技術の開発・普及の結果、さまざまな職場で効率化が図られ、先進資本主義諸国においても、絶対的剰余価値を獲得するのに十分な余剰労働力が生み出されている。この結果、先進資本主義諸国においても悪条件で労働させるスエットショップの復活やインフォーマルセクターの成長といった状況が生じてくる。このように、フレキシブルな蓄積の特徴としては、労働市場の分断化および「周辺フォーディズム」の創出が挙げられる。そしてこのフレキシブルな蓄積は次の四つのレベルで展開されている(26)。

一、労働過程においては、フレキシブルな労働／脱技術化と再技能化／サービスの生産が進展していく。

二、労働市場では労働市場の二極分化が生じる。

三、国家政策において規制緩和が行われる。

四、地理的移動性という点では、グローバルかつローカルな社会・経済圏が促進されていく。

このようにフレキシブルな蓄積を分析的に分けることで、積極的にフレキシビリティを肯定する立場――ピオレーとサーベルの『第二の産業分水嶺』で主張されているような新技術によって労働関係と生産システムの再構築の可能性の地平が開かれたというような主張――と、それとは正反対にフレキシビリティを否定的に捉える立場――例えば、フレキシビリティとは資本の論理に沿ったもので反動的で反労働者的な政治を正当化する権力用語だというような主張――の中間的位置にハーヴェイは立っているといえる。彼は、フレキシビリティの持つ政治的意味を理解しているのだが、資本主義は「固定資本」と「建造環境」から分離されえないから、過剰蓄積の危機を回避する戦略としては時間・空間的転換しかないと捉えている。したがって、フレキシビリティもまたその範疇で捉えられるべきだと考えているのだ。

そして、フレキシブルな蓄積はこのような生産過程における変容は先述の議論に沿うならば、我々の社会空間にも大きな影響を及ぼすはずだ。それは、この新しい蓄積体制のもとで時間―空間の圧縮は新しい次元に突入したことによって特徴づけられている。現代的

な時間―空間の圧縮は、フォーディズムの危機を回避するために架空資本構成（例えば、信用の発達など）とME（Micro Electronics）技術・情報化による新しい技術開発と組織形態の出現によってもたらされた。それにより、さらなる空間的障壁の崩壊が可能になっていった。つまり、「時間による空間の廃絶」がさらに進展していったのである。

しかし、このことは空間的条件が資本蓄積において決定的な契機ではなくなったことを意味しているわけではない。逆に、一見すると空間的障壁が重要ではなくなったように見えるが、逆に「それだけ多様に分化した場所への誘因は資本にとって大きな魅力」を持つものとなる。それは、「資本フローの高度に単一化されたグローバルな空間経済の内部において断片、不安定、そして一時的で不均等な発展が産出される」[27]というパラドクスを生み出すことになるのだ。資本は、一定程度の空間的均質化が達成されたとき、あらゆるところに偏在するのではなく、逆に、少しでも有利な場所を見つけだすのである。それゆえ、空間的均質化の過程において以前にもまして空間的不均等性が増大されていくことになる。フレキシブルな蓄積のもとでは特定空間の特質が重要となり、結果として空間的カテゴリーが時間的カテゴリーよりも優位に立つ状況を生みだしているのである。

むすびにかえて：〈場所〉への回帰

モダニズムの空間によって形作られた知覚道具しか持たない我々は、時間―空間の圧縮の新たな次元によってもたらされた変容についていくことができない。ハーヴェイによるならば、現代の都市空間はまさに「ハイパースペース化」（Jameson, F.）[28]しているのである。そしてこの時間―空間の圧縮の新しい段階、すなわち空間の時間に対する優位とそれに対応する時間―空間の経験の変容がポストモダニズムのゆらぎ・不安定性・はかなさを生みだす源泉となっていく。

このように、ハーヴェイはポストモダニズムにおける「場所に対する空間の優位」（カステル）を明らかにしていく。彼らにとって、ポストモダンとはアイデンティティや社会的秩序の基盤となってきた〈場所〉の解体であり、我々は一種の緊張状態にさらされている状況を意味する。このような〝暮らしづらい社会〟において〈場所〉に基づくオーセンティックな共同体の設立を目指されることになる。もちろんこの段階になると、場所とは従来のフェイス・トゥ・フェイスの関係を成立させていた物質的基盤のみを意味するものではなくなる。というのも、資本主義の地理的・歴史的展開の過程で、我々は実際に存在する場所からは独立して〈場所〉を想像することが可能になるくらい場所から自由になってきたからである。つまり、ポストモダンにおける場所とは、単に物質的な質を獲得する実践に

よってのみならず、それ以上に〈場所〉を表象する実践によっても構築されるといえる[29]。

このようなハーヴェイの議論に対してさまざまな議論がある。カッツネルソンは「思弁的で、偶然的で、時には遊技的でさえある」[30]という批判をしている。確かに、ハーヴェイのポストモダン診断に触れた場合、このような印象は拭えない。

ハーヴェイの議論にあっては資本主義システムに根ざす社会問題・社会闘争や矛盾が空間編成の問題に還元されていく。その結果、初期の著作において空間編成なしは空間の資本による組織化という局面、つまり資本主義社会における空間的契機を描き出すことに注目し、そこで一定の成果を得た。社会的空間の編成に目を向けた場合、我々の社会空間である都市空間が持つ労働力の生産・再生産空間という性質から、生産空間と都市空間の連関、ハーヴェイの用語を用いるならば「構造的一体性」の獲得が描かれている。しかし、明らかにこの議論では空間概念の矮小化が起こっている。都市の一体性を保障する構造的一体性はあくまで資源的・物質的な空間基盤に成立している。我々の社会空間は素材的ないしは消費されるどちらかといえば副次的な空間として描かれているのである。一方、社会的な空間としての〈場所〉は、ポストモダンにおける議論において重要な位置を与えられている。この場所が、我々の社会空間を意味するならば、そこに資本とそれに付随する権力の介入を重視すべきである。しかし、前述しているように彼は、ポストモダンにおいて〈場所〉への回帰を志向している。ということは、ここにおける〈場所〉とは初期の著作における〈場所〉と性格を異にしている。おそらく、マッシーが指摘するように「空間的なものの領域を、事実上、脱＝政治化している」ために、このような概念の混乱・矮小化が生じているといえる。

さらに、ツーキンが指摘しているようにポストモダンにおいて空間は、境界性（Turner, V.）を獲得し、空間的アイデンティティを獲得する努力を複雑にしている[31]。したがって、単純な場所への回帰は一種のイデオロギーとして働く危険をはらんでいる。

以上のように、ハーヴェイの議論を中心として、資本主義社会におけるヘゲモニーが持つ空間的契機を眺めてきた。ここで、資本蓄積過程においていかに地理的不平等が生成され、それが空間的に組織化されていくかが明らかになっていった。しかし、現代的なヘゲモニーの空間的形態について考えた場合、不十分な点が多々見られた。この克服は資本主義社会分析にとって今後の重要な課題といえよう。

［注］

（1）例えば、ロストーなどがその代表例として挙げられる。

（2）Harvey, D. (1993)

（3）Marx, K. (1857-1858), p.438.および、Harvey, D. (1985:一九九一)、第2章参照。

（4）Lefebvre, H. (1973: 1991).

（5）デミロビッチ, A.（一九九〇）。また、この点の詳しい議論に関し

ては、拙稿（一九九七）を参照。

(6) 例えば、平田清明（一九九三）参照。

(7) たしかに、レギュラシオン理論の代表的研究者であるリピエッツは空間に関する言及も行っている。しかし、リピエッツによると私たちの生活空間は「社会的総体の物的次元の一つ（もう一つの次元は時間である）以外の物ではありえない。社会的総体はもちろん複合的なものであり、それ自体、多様な社会的実践と社会的諸関係から構成される」。そしてこの社会的実践は対立的な性格を持ちながらも、その過程の中で妥協が成立し、一時的に安定した社会諸関係を生みだしていく。つまり、生活空間の安定性もまたレギュラシオン様式によって規定されていくのである。したがって、空間は妥協形成にとって争点となるにしても、空間形態が社会闘争過程において重要な契機と見なされなくなってしまう可能性をはらむ。Lipetz, A.（一九九二）、一九五頁。

(8) Castells, M. (1983), p.303.

(9) マッシーは、このような空間概念の混乱状況は、空間概念を脱政治化する働きをもっていると主張している。彼女は、空間こそ政治的であるといい、空間を根拠に政治状況を再構成することを目指している。Massey, D. (1993).

(10) 確かに、世界システム論において主体的行為としての「反システム運動」という分析概念もある。ただし、この運動はシステム構造を変容させる限りにおいて、遡及的に「反システム運動であった」と規定される。したがって、運動固有の意味ではなくあくまでもシステムの論理から特徴づけられる、いわば「システム決定論」である。

(11) 水岡氏によると従来までの地理学において優勢であった諸現象の空間的差異を記述する姿勢が、空間の社会理論として地理学を規定しなおし、社会・経済空間が生産される過程を社会諸科学をふまえて探求するという方向に変化していった。そして、この流れはその基礎とする社会理論に応じて、大きく三つに分類される。第一は、経済立地論や新古典派経済学に基礎を置く一九五〇年代半ばから発展した計量・理論地理学。第二には、一九七〇年代に発展した現象学や心理学を用い主観的な世界における行動からの社会的空間の生産についての議論。そして、『Antipode』に代表されるマルクス主義の自由な解釈に基づく社会・経済地理学の立場。ここで取り上げるハーベイはこの第三の立場に分類される。水岡不二雄（一九九二）参照。

(12) Soja, E. (1980:一九九六)、四七頁。

(13) Harvey, D. (1985:一九九一)、第八章参照。

(14) このような地理的移動の能力は優れて生産の社会的・技術的条件に依存するものである。ハーヴェイは後述する資本の第二次循環の議論において、従来のマルクス主義的な説明とは異なり、資本家間や階級闘争はこの社会的・技術的な条件ではなくすぐれた立地点をめぐって行われるのであって、この諸条件はその地理的特性に対応して選択されていくものだと主張する。つまり、社会的・技術的条件は社会闘争と社会変動に関しては副次的な契機とされるのである。

(15) 「景観landscape」とは地理学の対象を社会・自然の双方の地表の可視的な形態に求め、その相観の類型化や発生史を研究の課題にすえる景観学派に端を発する用語。「景観」は単なる「眺め」という意味ではなく、社会過程が刻みつけ地表に根をおろした物的諸対象の構造といった意味で使われる。

(16) Harvey, D., 前掲書、二三八頁。

(17) Harvey, D. (1982:一九九〇)、五五〇頁。なお、空間編成とは従

来までの地域構造論が対象としてきた数量的な地域特性をあらわすのではなく、社会的・経済的空間の生産に関わる過程をあらわしている。

(18) この資本の第一次循環から第二次循環への切り替えの契機が明確ではないという批判がある。しかし、この論文では経済学的議論の精密性は副次的な問題として扱うこととする。

(19) Harvey, D. (1985: 一九九一)、三一頁。

(20) Harvey, D. (1973: 一九八〇)、三一八頁。

(21) Harvey, D. (1985: 一九九一)、一二六〇頁。

(22) 同書、一二六七頁。

(23) 同書、四一頁。

(24) Harvey, D. (1989), p.240. また、ハーヴェイはこのような「資本の都市化」から「意識の都市化」の過程をみている。そしてそこであらわれるのは「都市化された人間性」であるとしている。

(25) ibid., p.186.

(26) Harvey, D. (1991).

(27) Harvey, D. (1989), p.294.

(28) ibid. p.201. ジェイムソンは資本主義におけるの社会の空間的ロジック発展様式を3つの次元に分けている。それは、市場資本主義、独占資本主義、そして多国籍（ポストモダン）資本主義である。そして、最後の多国籍（ポストモダン）資本主義における空間のロジックこそ、この「ハイパースペース」または「スキゾ・スペース」なのである。この空間のロジックは、均質であると同時に分断されている。Jameson, F. (1984)および(1991)参照。

(29) Harvey, D. (1993)。ここでは、紙幅の関係上詳しく述べることはできないが、ポストモダンにおける我々の空間的実践は、ルフェーブルが「経験されたもの」「知覚されたもの」「想像されたもの」という三つの次元と、「接近可能性と距離化」「空間の領有と使用」「空間の支配とコントロール」「空間の生産」という空間的実践における四つの側面とのマトリックスによって説明される。Harvey, D. (1989), pp.218-223.

(30) Katznelson, I. (1992).

(31) Zukin, S. (1992)を参照。

[参考文献]

Castells, M. (1983) *The City and the Grassroots*, Edward Arnold

ディミロビッチ, A.（一九九〇）「レギュラシオンにおけるヘゲモニー概念」『情況』第八巻、情況出版

Harvey, D. (1973: 一九八〇) *Social Justice and the City*, Edward Arnold（竹内啓一・松本正美訳『都市と社会的不平等』、日本ブリタニカ）

——(1982: 一九九〇) The Limits to Capital, Basil Blackwell（松石勝彦ほか訳『空間編成の経済理論』、大明堂）

——(1985: 一九九一) *The Urbanization of Capital*, John Hopkins University Press（水岡不二雄監訳『都市の資本論』、青木書店）

——(1989) *The Condition of Postmodernity*, Basil Blackwell

——(1991) "Flexibility: Threat or Opportunity?", *Socialist Review*, 21(1)

——(1993) "From Space to Place and Back Again", *in Mapping the Futures*

平田清明（一九九三）『市民社会とレギュラシオン』、岩波書店

岩永真治（一九九二）「デイヴィッド・ハーヴェイと現代都市」吉原直樹編著『都市の思想』、青木書店

Jameson, F. (1984) "Postmodernism,or the cultural logic of late capitalism", *New Left Review*, (146)

——(1991) *Postmodernism, or, the cultural logic of late capitalism*, Verso
貝沼洵（一九九〇）「『社会的空間』論序説」『名古屋大学社会学論集』第一一号
Katznelson, I. (1992) *Marxism and the City*, Clarendon Press
Lefebvre, H. (1973) *La Survie du Capitalism*, Editions Anthropos
Lipetz, A.（一九九一）"Une approche reulationiste sur le futur de l'eologie urbaine"（若森章夫訳「『都市のエコロジーの将来』とレギュラシオン・アプローチ」関西大学『経済論集』第四二巻四号）
Marx, K. (1857-1859:一九六一) *Grundrisee*（高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』大月書店）
Massey, D. (1993) "Politics and Space/Time", in Keith, M. & Pile, S. (eds.) *Place and the Politics of Identity*, Routledge
水岡不二雄（一九九二）『経済地理学』、青木書店
関嘉寛（一九九七）「レギュラシオン理論における可能性と限界」『年報人間科学』第十八号、大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室
Soja, E. (1980:一九九六) "Socio-spatial dialectic", *Annals of the Association of American Geographers*, 70（水内俊雄訳「社会—空間弁証法」日本地理学会「空間と社会」研究グループ編『社会—空間研究の地平』）
吉原直樹（一九九四）『都市空間の社会理論』、東京大学出版会
Zukin, S. (1992) "Postmodern urban landscape", in Lash, S. and Friedman, J. (eds.) *Modernity and Identity*, Blackwell

On the spatial phase of the modern capitalistic society--a consideration of Harvey's urban spatial theory

Yoshihiro SEKI

Today, as Giddens argues, the temporal point of view is dominant in social theories. But it could make it clear what the society is. Thus, we need the spatial perspective for analyzing the contemporary society.

For this reason, I focus on the process of generating the social space which Harvey especially has brought into question. Harvey allege that the urban space is created through the surplus accumulation the processes of capital accumulation produce, 'the secondary circuit of capital'. In this process, investment makes the built environment for product and consumption. Moreover, it give rise to geographical unevenness rather than homogeneous space. This unevenness represents social inequalities, and sustain it.

The spatial formation which is organized by the capital proceeds a new stage. It has been caused by the transformation of the mode of capital accumulation, that is, from Fordism to 'Flexible accumulation'. In this stage, we are exposed to 'the time -space compression' that we have never experienced. Post-modernism is characterized by this situation. In post-modern, we have to get a new place in order to take back homogeneous and fragmented identities.

However, Harvey's theory on the urban space and post-modernism has contradiction. I think the place he pays attention to is one which the capital never intervenes.

Key Words

space
the secondary circuit of capital
flexible accumulation
time-space compression
place